言語表現の意味の背後の思想家たち：意味を支える知識システムについての試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 義晴 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/986

言語表現の意味の背後の思想家たち

意味を支える知識システムについての試論

竹　内　義　晴

1　心の中の思想家に支えられて成り立っている言語表現の意味
2　心の社会のモデル
3　心の中の思想家たちと言語表現
4　意味能力を構成するモジュールとしての心の中の思想家たち

1　心の中の思想家に支えられて成り立っている言語表現の意味

言語行為のような語用論的な次元の問題を脇に置けば、言語表現の文字通りの意味には、何らかの認知的な意味の単位が対応づけられる。これが現在の認知科学的な言語研究において広く受け入れられている考えである(Jackendoff1989, Bierwisch1983, Schwarz1990)。そのような認知的な意味の単位については、それが概念である、とか、プロトタイプである、とか、または何らかの神経回路網の興奮パターンである、というように、それぞれの立場において考え方に違いはある。しかし、いずれにしても、そのような単位が言語表現の意味を構成する基本的な要素であるという点で大方の研究者の見解は一致している。

私は、このような言語表現の意味の理論について、大枠において正しいと思う。

しかし、このような意味記述の枠組みからはみ出してしまうが、単純に語用論的な問題と考えるべきではないと思われる意味の現象がある。この論文では、そのような境界的な現象を取り上げ、人間の言語表現の意味を成り立たせるために、直接的な意味構成要素に依存した意味システムの他に、思想家たちが集まって暮らしている社会に似た知識システムが働いているということを主張したい。この知識システムが言語表現の意味を支える背景的な働きをしているのである。

日本語でよく使われる表現に「どうも」というのがある。次の例文をみてみよう。

1)　「どうも」の使い方がどうもよくわからない
1′)　「どうも」の使い方がちょっとよくわからない
2)　ちょっと来てください
2′) *どうも来てください
3)　彼はどうも来ないな
3′)　彼は多分来ないな
4)　犯人はどうも内部の者(のよう)だ
4′)　犯人は多分内部の者(*のよう)だ
5)　犯人は内部の者のようだ。どうも困ったな
5′)　犯人は内部の者のようだ。*多分困ったな
6)　やあ、どうもどうも
6′) *やあ、多分多分
7)　どうもすみません
7′) ?どうも楽しいですね

(1)の例をみると、およそ(1′)の例と大意は変わらず、どうもは**程度の少なさ**を表わしているようでもある。しかし、(2)の例文をみると、この表現の意味が**程度の少なさ**であると考えるのはよくないことがわかる。(3)の例をみると、どうもは**推量的な曖昧さ**を表わしているようでもある。ではあるが、(4)の例をみるとどうもは単なる**推量的な曖昧さ**を表わしているのではない。(5)の例で見当がつくように、どうもは**何か好ましくないこと**を表現している。それで(6)のようにあいさつとしてどうもが使われたりするし、(7)のように謝るときにもどうもが使われる。(7′)のように楽しくて、**好ましくない**ことなどありそうもない文脈にどうもはどうもそぐわない。

私は、「どうも」を使う私たちの言語使用の背後には、次のような悟り切った**あきらめの思想家**の思想が隠れているのだと思う：

あきらめの思想家の思想：

私たちの生活にはいつもいやなことが起こる。しかし私たちは、そのことを避けて通るわけにはいかない。これは私たちの定めなのであり、私

たちはこれを共有していかなくてはならない。

この思想は私たちに恒常的にある種のあきらめを迫る。「どうも」とあいさつする私たちは、**暑さ・寒さ**や、**忙しさ・金のなさ**、**運の悪さ**や**人生の不条理**を共有していることをお互いに解り合い、なぐさめ合う。「どうもありがとう」と感謝する場合にさえ私たちは、自分の利益のために相手に何らかの労苦を味合わせることに至った巡り会わせの悪さが気になり、その気持ちを共有し合おうとするのである。

「どうも変だなあ、おかしいぞ」とトラブルの原因を追及する私たちには、あきらめの思想などないではないか、という反論は当然予想される。この場合は次のように考えたらどうだろうか。私たちは、トラブルの原因を追及する労苦を引き受けることについてあきらめをもてるからこそ、追及の手をゆるめずにいることができるのだ。「なんか変だなあ、おかしいぞ」では、面倒くさい原因追及の作業をしていることが途中で馬鹿馬鹿しくなって、だれかに作業をまかせてしまいそうである。

私たちが「どうも」という表現を使うとき、私たちの言語システムでは、このような**あきらめ**の思想を持った**あきらめの思想家**が主導権を握っている。このように考えると、一見したところ不可解に思える「どうも」の使い方がうまく説明できそうだ。

Umberto Eco(1976)はイデオロギー批判としての記号論の可能性を論じている。Eco流の議論を私なりに噛みくだいて構成してみよう。Ecoによれば、例えば「エネルギーをたっぷり使った暖かい暮らし」のような表現では、暖かさを快適さと結びつけ、エネルギーの消費を奨励する産業資本のイデオロギーが前面に出されている。しかしこのようなイデオロギーの対極には、今日の地球環境問題を巡る議論には絶えずみられるように、エネルギーの浪費の問題や、その生産に伴うリスクを懸念するエコロジストのイデオロギーが当然存在する。例に挙げた表現においては、しかし、一つのイデオロギーが前面に出される一方で、別のイデオロギーが隠蔽される構造になっている。記号論の研究によって、このようなテキストの背景に隠されたイデオロギーの構造を明らかにすることができる、というのである。

このようなEcoの議論にも、私たちは言語表現(テキスト)の背後で働いている思想の問題の重要さを見て取ることができる。私はこの論文では、言語表現(テキスト)の背後で働いている思想を、イデオロギー批判的な観点からの扱いとは別に、言語表現の意味理解を構成している要素として扱うことが大切であるということを議論したい。私たちの言語表現はその背後の種々の思想に支えられてこそ、その豊かな意味伝達の働きを果たすことができる。言語表現とその背後の思想がどのようにインタラクトする仕組になっているのかという問題は、言語の意味研究の研究領域の重要な部分を占めていると私は考える。

2　心の社会のモデル

人工知能学者であるMarvin Minsky(1985)は「心の社会」という面白い考え方を提案している。私たちの心は社会と同じ仕組で成り立っているというのである。

私たちの社会は、その構成員同士の複雑に組織されたインタラクションによって成り立っていると考えられる。社会そのものの全体がどのようになっているのかとか、自分が社会全体との関わりでどのような役割を果たしているのかとか、そのようなことについてだれもはっきりとはわからないままに、私たちは、それぞれの場面で、さまざまに意味のある役割を果たしながら日々の生活をおくっている。それでいて、社会そのものは、その在り方に種々の差異はあるものの、全体として「社会としての成り立ち」を保ちながら、存在し活動を続けている。

心の社会にもまた様々な役割を果たす人たちが様々な集団を形成し、協力し合ったり、競争したり、または争い合ったりしながら生活している。**積み木遊び**のような一見単純にみえる作業をする子供の心の中には、**作り屋**と**壊し屋**がいる。作り屋の集団には、**始める**、**加える**、**終わる**などの係の集団がいる。**加える**係の集団には、**見つける**、**手に入れる**、**置く**などの係の集団がいる、**置く**係の集団には、**動かす**、**手を放す**などの係の集団がいる。**作り屋**と**壊し屋**が競争関係になければそもそも**積み木遊び**の楽しさなど成り立たない。**動かす**係と**手を放す**係が協調しなければ、**積み木を置く**ことなどできない。このようにして、様々な役割を果たす人たちが、インタラクティブに活

動している結果が、**積み木遊び**なのであり、更には私たちの心の働きそのものなのだと考えられるのである。

基本的に「心の社会」の考え方は、現代の認知科学の研究において明らかにされてきた、神経回路網としての人間の脳の働きについての知見を踏まえた上で提案されている。私たちの認知の働きは、脳の上での様々な認知モジュールの協調分散処理的インタラクションの複合である。文法の核心部分は、音韻、形態統語、意味の三つのモジュールによって構成されているという考えは広く受け入れられてきた。人間の認知システム全体という観点からみれば、これらの文法モジュールは、他の認知モジュールと協調しながら働き、言語と関係している私たちのさまざまな言語行動を成り立たせている。

「心の社会」のモデルでは、これらの認知モジュールのことを「心の社会」の中の住人や、住人の集団と考えているのである。この論文では、そのような「心の社会」の住人として、心の思想家たちが言語表現の背後にいて、言語表現の意味が成り立つのを支えているのだ、という議論を提示したい。

3　心の中の思想家たちと言語表現

第二章で「どうも」の意味を理解するのには、その意味の背景にいる**あきらめの思想家**の考え方にふれる必要があるという議論をした。この章では、一連の言語表現を例にとり、それらの言語表現の背後にどんな思想家が隠れているのかを紹介してみる。言語表現にはドイツ語の例を使ったのは、私の専門がドイツ語学であるという理由によるものであって、ドイツ語の表現の背後に隠れている思想家たちの社会が特に興味深いということではない。

so wie so(いずれにしても)：

この表現の背後にはやはり**あきらめの思想家**が隠れている。**あきらめの思想家**は**悲観主義者**でもある。よいことなど起きない。いつも悪いことが起きるものなのだと思っている。**あきらめの思想家**と一緒に**めんどうくさがり屋**も隠れているのだろう。「どうでもいいけど」とか、「大差ないよ」という気分が強い。**めんどうくさがり屋**の心の住人の中の実力者は労苦をいやがる**快楽主義者**である。

irgendwie(なんか)：

so wie soとはぜんぜん気分が違っている。この表現の背後にいるのは**知りたがり屋**なのであって**知りたがり屋**は**あきらめない**のである。「わかりたいけど、わかりにくいなあ、なんだろう」とがんばってしまうのが**知りたがり屋**だ。

egal(どうでもいい)：

独断主義者は重要なことがらの領域とそうでない事柄の領域の境界を自分で決めることができる。**唯我独尊**なのである。お茶とコーヒーのどちらがよいかと尋ねられて、egalと言うのは、相手が設定した「お茶かコーヒーか」という重要なことがらの領域を、自分だけの判断で、重要な領域から締め出してしまうことになる。相手は「お茶かコーヒーか」ということを大切にしたいのに、それを大切ではないと言っているのだ。そういうことをされて自尊心を傷つけられないのは、ごく特殊な場合に限られる。

also(それじゃ)：

秩序崇拝主義者が現われると、alsoを連発し始める。「ものごとに当然割り振られるべき流れ」に身を任せてしまうのである。「ものごとに当然割り振られるべき流れ」などというものは、なんらかの権威づけられた知識、または自分の知識への確信からしか導かれない。この**秩序崇拝主義者**の心は自分の思考や行動の基準を既成の秩序にたよる**権威主義者**や、またはひとりよがりな自信家によって構成されているのだろう。

私たちはいずれにしても何らかの信念の体系に支えられて生きている。そのことを考慮に入れるなら、**秩序崇拝主義者**という意地悪な名前ではなく、**常識家**という穏やかな名前を使ってもよい。しかし、自分の抱く信念を常識とみなしていられるのも、たかだか何らかのうぬぼれによるのである。**常識家**の心の中の実力者の一人は**秩序崇拝主義者**に違いない。

selbstverständlich(おのずから明らか) /natürlich(もちろん)：

ことがらの必然を表現する語彙であるselbstverständlichやnatürlichを使ったところで、自分の**言ったことの真実性**が保証されるわけではない。このことは、次に示す相互に矛盾する意見にselbstverständlichやnatür-

lichが使われていることでもわかる。

"Die Erde ist flat, das ist selbstverständlich."
"Natürlich stimmt das nicht. Sieh mal die Fotoaufnahme von dem Raumschiff"

それでは、どうして、このような言葉の使い方がされるのか。**言語意味実在論者**は、言葉で表現されたことに事実を重ね合わすことができるという錯覚にとらわれているのだ。昔から人間はこの種の錯覚に支えられながら、自分の信念や自我を保ってきた。

aber(でも／しかし)：

aberと言う場合、**当然のものごとの流れ**に対して、そうではないということを表現するのである。"Morgen ist Sonntag, also muß ich nicht arbeiten(明日は日曜日だから、働かなくていい)"と言えればいいのに、"Morgen ist Sonntag, aber ich muß arbeiten（明日は日曜日だ、でも働かなくてはいけない)"と言わなくてはいけない。この点で、aberという表現の背後にいるのもやはり、**秩序崇拝主義者**である。しかし、aberの背後には、**懐疑主義者**の姿がより強く感じられる。**秩序崇拝主義者**の秩序への信頼を前史として、**懐疑主義者**は秩序への信頼の揺らぎを自分の旗印にする。**懐疑主義者**は**日曜日には働かなくて当然**という秩序への信頼をもはや保ち続けることはできない。

sehr geehrter Herr NN（とても尊敬さしあげているNN様)：

対人不信家がこういう紋切り型の表現の背後に隠れていると言ったら、ずいぶん不愉快に思う人がいると思う。それは、この指摘が的を得ているからこそだ。"sehr verachteter Herr NN（とても軽蔑さしあげているNN様)"などとは口が裂けても言わないのは、自分が相手のことを偉いなんて思っていないことは当り前だし、言わなくても自明のことだからだ。sehr geehrter Herr NNなどと馬鹿みたいに同じことを何回も繰り返すのは、相手に対する尊敬の念など、いくら言っても信じてもらえるわけがないからだ。自分だって相手が尊敬に値するなんて思ってはいないのだから。

対人不信家の心の中の住民たちには**懐疑主義者**が多い。

しかし、この**対人不信**の**懐疑主義者**の思想が、かえって**平和主義者としての行動**にもつながっていたりするから皮肉である。**お人好し**（人を信じられる・理解できると思い込むことのできる人間）となかよしの**博愛主義者**は、自分の思っていることをすぐ“Du Dummkopf（馬鹿）”などと口走ってしまい、喧嘩を始めてしまったりする。しかし、**懐疑主義者**は、そういう単純な行動はとらない。

weißt du?（わかりますか）/gelt?（いいかい）：

発言の途中で、繰り返し、相手に自分の意見の有効性を確認させる発話者の心の中には、対人不信の病におかされている**懐疑主義者**が住んでいるといってよい。**懐疑主義者**は自分の考えが受け入れられるかどうか不安でたまらないのだ。それで**懐疑主義者**に扇動された**防御主義者**が所かまわず、防衛拠点の確保に奔走することになる。ところが、この**懐疑主義者**の手先の**防御主義者**の防衛行動は、一転して、**唯我独尊**の**独断主義者**の攻撃行動に転じてしまう可能性を秘めている。不安な人間はいたるところで先回りをして、合意の先取り、安全確保の手を打とうとする。その結果、**懐疑主義者**は「私が分かることはあなたも分かるはず」と同意を押しつけながら、対話の**独裁主義者**になってしまうのである。

独裁主義者の心には不安でたまらない**懐疑主義者**が住んでいることがある、ということ自体はわかりやすい。**懐疑主義者**が**独裁主義者**になるのは、必ずしも意識してのことでないこともあるだろう。しかし、一旦**独裁主義者**としての行動が人々に意識されたとき、「あの人は本当は気が弱いだけなのよね」と独裁者を弁護してすますわけにはいかない。

ja（うん）/nein（否定）/doch（おっとどっこい）：

ものごとはすべて肯定命題と否定命題によって表現されると考える**合理主義者**が、これらの表現の背後には共通して隠れている。

前項、weißt du?/ gelt?におけるのと同様の**合意の先取り**をねらうのであっても、jaを連発する人間に**懐疑主義者**の不安は感じられない。「思ったとおり／いけいけそのとおり」というノリは**楽観主義者**のものである。

楽観主義者は肯定命題でものごとを表現するさなかに、その否定的対称命題が成り立ちうるなどという可能性に思いを巡らそうなどとは考えもしない。

neinを単純に拒絶と考えてはいけない。**落ち着きの人**と同居している冷静な**合理主義者**にとっては、命題の否定的な実現の可能性は予測済みである。ことがらが否定つき命題で表現される場合には、ただついでにneinと言うのである。たとえ、心のなかの**楽観主義者**が、否定的命題の成立の可能性など予測もせずに、事実に立ち向かおうとしていたとしても、否定的現実に出合うや否や、冷静な**合理主義者**がすばやく**楽観主義者**とバトンタッチをし、平気な顔でただ、neinと言うのである。

心のなかに**悲観主義者**が住む**悲観的合理主義者**は、命題の否定的成立の可能性を予測している。予測に反して、命題が否定されずに成り立つとわかった場合、**悲観的合理主義者**は一転して**楽観主義者**が住む**楽観的合理主義者**となってdochという。この場合、**悲観主義者**は**攻撃主義者**と連携を結び、**楽観主義者**は**防御主義者**と連携を結んでいるのだろう。dochの気分は強気であり、陽気である。**悲観的合理主義**は、辛いことの多い現実への防御を優先した弱気の哲学でもある。悲観的予測は、的中したときのショックが少なくてすむし、はずれたときにかえって明るくなれる。こういう哲学そのものは決して陽気ではないが、人生の知恵として多くの人に共有されている。

eben(いかにもその通り)：

相手の発言に「そう、その通り、私もそう考えていたのよ」と正当性の認可を与えたがるのは、自分ではなにもまともな考えを提示する能力がないのに、議論における自分の存在理由を確保したがる**体面主義者**。

peinlich(かわいそう)：

人の**痛み**や**苦しみ**を自分のものとして感じることのできる人間は、他者を理解することができる。そのような**博愛主義者**がpeinlichの背景にいる。**博愛主義者**はどうして人の**痛み**や**苦しみ**を理解できるのだろうか。**博愛主義者**は自分自身の**痛み**や**苦しみ**をもっとも忌み嫌う**利己主義者**に他ならないからだ。もっとも**利己主義者**が**博愛主義者**になるためには、

何らかの奇蹟が必要なのであって、ある人間が**利己主義者**である、という理由だけで、必ず／たいてい／たぶん彼が**博愛主義者**である、という推論は決して成り立たない。

VERBSTAMM-(e)!(命令法)：

文法形式もまた言語表現の一部であり、背後に思想家が隠れている。命令法の背後には、自分の利益・関心のために他者を走らせる**利己主義者**が見える。私たちは多くの場合、命令されると不快に思うが、その一つの理由は、命令する人間の中の利己主義が見えるからである。

bitte(どうぞ)：

人間はだれもいずれは**利己主義者**なのである。それぞれの個体が自分の生命の維持と拡大のために利己的に活動しているからこそ、全体としての生態系は存在し続けることができる。それにもかかわらず「だれそれは利己主義者だ」などと言って無意味なわけではないのは、たいていの人間がむき出しの**利己主義者**ではなく、フロイトの言うところの社会化された存在であり、**穏健主義者**であるからだ。

穏健主義者の心の中では、**利己主義者**の思想や行動と拮抗する思想家たちが大きな力をもっている。命令表現を和らげるbitteの背後にいるのは、「協調しよう」と語りかける**平和主義者**である。**平和主義者**はしかし、なにを拠り所に協調を訴えることができるのだろうか。**平和主義者**の背後には、社会の仕組と人間の協調の必要性についてなんらかの理解をもつ**社会思想家**がいるに違いない。この**社会思想家**はハーバーマスであったり、ガンジーであったり、または市井の哲人であったりするだろう。いずれにしても、その**社会思想家**の思想の深さと強靭さの違いによって、**平和主義者**の力は大きく影響をうけるに違いない。**平和主義者**の抱いている社会思想が薄っぺらな「人類皆兄弟」式のものであるならば、同胞の死への報復を訴える**国家主義者**の「お涙ちょうだい」的主戦論を退ける力など期待できようもない。**国家主義者**の心の社会の大多数の人間は自己の集団の利益を優先させたがる**利己主義者**たちである。

danke(ありがとう)：

例えばレストランでだれかと一緒に食事をしているときに、おいしいか

と尋ねられたら、ドイツ語を母語とする人たちはdankeという。こんな単純なやり取りが、日本語を母語とする人間には習得しにくい。何かを断わったり、拒絶するときにnein, danke!と言ったりするのも理解しにくい。dankeを言う話し手の心の中にいるのもやはり何らかの**平和主義者**には違いない。この**平和主義者**の心の中には更に、他者の好意を感じる**博愛主義者**と、他者との友好関係を維持していこうとする**協調主義者**が住んでいる。何らかの自分に対する好意に対して、感謝の気持ちを伝えたい欲求や、相手との協調関係を維持する意志や必要からこの言葉を使うのだ。

しかし、この**平和主義者**のなかの**博愛主義者**はどのような場合にそのような好意を感じ、また**協調主義者**は、どのような場合にそれに対する謝意を表現しなければならないと判断するのだろう。基本的にはこのこともまたドイツ語を母語として育つ子供のなかの**博愛主義者**や**協調主義者**が社会生活のなかで獲得してゆくものなのだ。

Johnson & Lakoff 1980は、人間の文化を背景にしたゲシュタルトの成立には儀式的行動の果たす役割が大きいことを指摘している。例えば、日本のスポーツ少年たちが競技場に出入りする場合に、競技場そのものに対してお辞儀をする。このような行動様式は、子供が競技団体に加入すると一ヵ月もしないうちに獲得されてしまう。このような儀式的な行動様式の獲得の過程において、日本のスポーツ少年たちは、次第に**競技場に対する感謝の念**のような不思議なものを教え込まれるのである。

ドイツ語を母語とする子供たちにとって、dankeという語彙の用法を獲得することについても、家庭での食卓でのやり取りや、大人にものを頼んだり、断わったり断わられたりのやり取りにおける礼儀のしつけが重要な意味をもっているのだろう。そこで獲得される**博愛主義者**の思想には、どのようなことがらに好意を感じるべきであるかという項目が含まれているはずである。また、この**協調主義者**が学ぶ思想には、少なくとも対人関係についてのある基本的な認識が含まれいる。この思想は日本語を母語とする文化の人間には理解し難い所があるが、それは次項で触れる**個人主義者**の思想の理解し難さに由来しているのだと私は考える。

dankeの背後では、このように、**平和主義者**の中の**博愛主義者**と**協調主義者**がいっしょに働いていると考えられる。しかし、場合によっては、他者の好意をうれしく思う**博愛主義者**の主導で使われるdankeもあれば、主に**協調主義者**の意向で用いられているdankeもあるだろう。この項目で、日本語を母語とする人間にとって難しいと紹介して議論した例は、じつは、後者のような、**博愛主義者**が隠れてしまっているdankeである。それに比べると**博愛主義者主導**のdankeはわかりやすい。

tut mir leid/leider(残念ながら)：

この表現の背後には、他者の困難を理解し、同情する**博愛主義者**がいるようでいて、実はその影は非常に薄い。どこへ行って何を頼んでも、この表現を使って断わられると取りつくしまがない。日本語を母語とする人間は、どうしてこのように冷たく人間をあしらうことができるものだろうか、と思ってしまったりする。

実は、ここでは、暖かい**博愛主義者**の代わりに前面に出ているのが**個人主義者**である。**個人主義者**に言わせれば、「あなたが困っているのは、つまるところあなたの責任によるのであって、私の知るところではない」、ということになる。だから、「困っていることは事実としてはわかるけれど、私の責任ではない。私の側の事情をあなたに合わせる積極的な理由もない、私はあなたではないのだから」、ということになるのだ。この表現が、相手の困ったことについて自分の責任に言及しているEntschuldigungとは随分感じが違っているのは、そのような事情による。

もっとも、このような**個人主義者**は基本的には**利己主義者**から構成されていて、自分を大切にしている。だから、自分を取り巻く社会的なつながりの中では、他者が自分のことは自分の責任でうまくやってくれるのなら、という留保つきではあるけれど、他者のことも大切にしたいのだ。そういうことで、この**個人主義者**は前項の**協調主義者**と無関係ではない。

gern(～したい)：

この表現を使う時には、楽天家の**楽観主義者**が心の前面に出てきているのだ。死ぬような恐ろしいことだって、したいことの対象になることはできる。しかし、そのしたい人間がしたいことを実行した結果がよくな

いことであることを想定しているとは考えられない。“Ich sterbe gern für dich(私はあなたのために死にたい)”と言ったあとに、“wenn du das willst(もしあなたが望むなら)” と続けることは可能だが、“wenn auch du das nicht willst(もしあなたが望まなくても)” と続けるとなんか変である。自分が死ぬことが、あなたの望みをかなえるという利益をもたらすと思えるから「死にたい」と思うことができる。自分が死ぬことが、あなたの望むことではなく、あなたの意にかなうという利益をもたらさないならば、「死にたい」などとだれも思わない。

このように、**楽観主義者**は、**利己主義者**でもある。自分の利益になることにだけ関心を集められるから、**楽観主義者**の人生は楽しく、明るい。飢えや戦火に苦しむ世界の人々についての情報を洪水のように受け取りながら、日々飽食に明け暮れる私たちの生活のトーンは、その生活のあり方のグロテスクさに目を向けない限りにおいては、底知れず明るい。

fleißig(勤勉だ)/faul(怠け者だ)：

勤勉さにかかわる形容詞には、人間の社会が時間をかけて絶対化しようとしてきた価値のシステムの根底をなす倫理観が染みついている。「勤勉は美徳である」という**禁欲主義者**の思想から逃れられたとき、仕事中毒や受験競争という病からも、自由競争という迷路からも逃れることができる。もしかしたら、生命という病からも。

edel(高貴な)/niedrig(下品な)：

身分や人品の上下を論ずる表現の背後には人間を価値付けることの是非を疑わない**差別主義者**がいる。

schön(美しい)/schmutzig(汚い)：

美しさを尺度にとる背後には、美の優越を疑わない**耽美主義者**がいる。

gut(よい) /schlecht(悪い)：

価値の泥沼から逃れようとするとき最後に残される究極の物差しの一つ。ものごとの善し悪しを前提とすることから逃れられればあなたは心の中の**形而上学者**を追い出すことができる。この議論は、「oben(上) / unten(下)の認識の前提には重力の効きを基礎に系統発生を経てでき上

がっている人間の空間認識の能力がある」という議論と接している。宇宙船に乗って無重力の世界に旅立てるとしても、重力空間から自由な人間存在というものが考えられるだろうか。

frei(自由な)：

様々な認識体系や社会体系のもつ矛盾を矛盾として認識し、その矛盾を取り除きたいと考える**理想主義者**は、その可能性があるかもしれないと思う**夢想家**と手を結ぶ。**理想主義者**は基本的に**懐疑主義者**であるはずだ。**懐疑主義者**の矛盾を感じ取る感性ならば、ものごとの実現の可能性をあおるほら話しにも疑いをもってもおかしくない。だから**理想主義者**が**夢想家**と手を結ぶ傾向が強いのは変な気がするが、他方、彼等の連合がもっともであるような気もする。そのような矛盾をはらんでいるのが心の思想家たちの社会の不思議なところなのである。この思想家は、体系そのものに疑いをもつことのない**先験論者**や**決定論者**、または、それどころか体系そのものに自分の存在理由を求めたがる**権威主義者**と対立することが多い。また、この思想家は価値を疑い切ることの不可能さを見抜いている**現実主義者**とも対立したりする。完全な自由を求めることが現実的でないとしても、疑い、あらがい、矛盾を和らげる試みそのものは現実的に実行可能である、と私は思うのだけれど。

plötzlich(突然に)：

事態が突然成立したと受け止める心は、平穏を基本とする**安定主義者**の住まいである。

schon(もう)：

事態の展開を予想していたよりも早いと受け止める心は、ものごとは変わらないものと理解する**のんびり屋**の住まいである。

noch(いまだに)：

事態が予想していたよりも早く展開しないと受け止める心は、ものごとは変化が基本と理解するせっかちな**いそがし屋**の住まいである。

以上、紙面や時間の制約から、決して充分な議論ができたとは言えないが、具体的な言語表現について説明を加えながら、意味の背後にいる「心の思想

家たち」のことを紹介した。これらの思想家たちの心の社会における活躍のおかげで、私たちは言語表現に非常に豊かな意味合いを込め、またそれを読み取ることもできるのだ。それぞれの言語表現の背後に様々な思想家たちがいると考えることによって、その表現の意味のある種のいきいきとした側面を説明することができる。

4　意味能力を構成するモジュールとしての心の中の思想家たち

私は決して、言語の意味の体系とその背後の思想の体系を一対一で結びつけようとするような短絡的な議論をしているのではない。言語を使うそれぞれの個人が、それぞれの文化・社会に属しているのであるから、それぞれにその枠組みに制約を受けたパーソナリティーを持っていることは否定できない。しかし、そのパーソナリティーの特長が何かということは非常に複雑で、わかりにくいのである。だから、私は、例えば、「ドイツ語を話す人たちの心の社会では個人主義の思想家の果たしている役割が大きいかもしれない。どのような役割を果たしているのかは複雑なようだけれど」というような、できるだけあいまいな説明をするのがいいと思う。

私たちは基本的に多重人格者であり、私たちの心の社会には複数の思想家たちが混在して生活している。私は純粋な**利己主義者**ではない。私の振るまいが多くの場合利己的であるとしても、私のなかの**博愛主義者**が目を覚まし、私の中の**利己主義者**を出し抜くこともある。その**博愛主義者的**な私の行動も、実は**利己主義者**にあやつられているのかもしれない。いずれにしても、心の社会の中での何らかの社会生活の結果として、だれか特定の思想家（集団）の立場が表に出てきているだけなのである。だから、特定の言語と特定の思想を直接結びつけることなどできるはずもない。言語の背後の心の社会は非常に複雑でダイナミックな構成をもっていて、その内部構造は、人間の社会の構造と同様に、簡単に説き明かされるようなものではないのである。

そもそもこの論文では、「心の社会の中の思想家」というメタファーを用いて、言語表現の意味の背後で働いている、広い意味での認知的モジュールについて理解しようとしてきた。このような対象が複雑でとらまえにくいからこそ、メタファーの力に頼ってしまう。しかし、これらの「思想家たち」という表現で名指されたものはいったい何に起源を持ち、どうして「心の社会の中の

思想家」として考えるとわかりやすいのだろうか。

「心の社会の中の思想家」のメタファーで表現されるモジュールには、その基本的な部分が、そもそも人間が動物として、自己の生命や種を保存しようとしたりするために、遺伝的にプログラムされている基本的な性向に由来しているものがあると思われる。**利己主義者／博愛主義者／攻撃主義者／防御主義者**のような性向がなければ、人間はそもそも自己の生命や種を保存できないだろう。

耽美主義者として、生殖のパートナーを美しいと評価して選択したり、生活に必要な食物を**おいしい**と評価しながら見分けたりする尺度もまた、遺伝的にプログラムされている部分が大きいだろう。さらには、様々な行動をとるために必要な事物や空間の性質に関する尺度もまた、そのような生得的なものに多くを頼っているに違いない。とすると、心の中にはそもそも生まれたときから住むことが決まっている**形而上学者**たちの一群がいるのだと考えるべきなのかもしれない。

これらの思想家たちのどこまでが生得的に決定されているのかという点では、当然のことながら多くの留保をしなければならない。人間はすべて生まれながらの**差別主義者**であるという主張もまた、注意深く扱われなくてはならない。生殖パートナー選別のために**美しさ**を評価したり、生き延びるための食物の選別のために**おいしさ**を評価する行動様式そのものは人間に共通のものだろう。しかしそうであるとしても、その行動様式の個別の内容はきわめて文化的なことがらであるに違いない。何が貴いのかという判断の総体は、さまざまに条件づけられている人間の複雑な認識作用の結果である。社会的な問題として「差別」が問題になる場合、「人間は差別をするものなのだ」などと言ってすますわけにはいかない。差別の起こる環境と差別の内実を問題にして現実的な対処をすべきなのだ。同様に、私たちの心の中の思想家たちの由来については、個別的に注意深い検討が必要である。

快楽主義者とか**知りたがり屋**は脳内のモルヒネ様物質エンドルフィンにあやつられている部分が大きいのに違いない。その意味では、これらの思想家の存在もまた生得的な要因に拠るところが大きい。

私たちの「心の思想家たちの社会」には哲学者や論理学者タイプの思想家たちも住んでいる。**平和主義者**が「平和は大切」と考えているように、思想家というものは普通、世界の成り立ちや、そのあるべき姿についての様々な考え方を持っているが、哲学者や論理学者タイプの思想家たちは、思想家たちの抱く考え方がどのように整合性をもって組み立てられたり、実行に移されたりするのかにより多くの関心を持っている。**合理主義者**、**理想主義者**、**決定論者**、**現実主義者**などは、そのような思想家たちの仲間なのだろう。これらの思想家たちのある基本的な部分はまた、人間の脳の記号処理的な計算機の働きとしての思考能力に由来しているに違いない。脳の計算機としての働きは私たちの意識には部分的には見えている。それで、私たちの思考の働きその部分について、**合理主義的な割りきった考え方**とか、**夢も希望もない現実主義的な考え方**というとらえ方がなされるのだろう。

私たちの心の中に住むことが決まっている思想家たちの生得性の程度というのはどの程度の範囲にまで及んでいるのだろうか。この問いに対して、今のところ私には満足な答えを出すことができない。いろいろな心の働きというのは、人間の脳の計算機的な働きによって、複雑に組み合わされ、さらにそれが複雑に組み合わされるということが何重にも絡み合ってできあがっている。それが「心の社会の中の思想家たち」として私たちに見えているのだ。これらの組み合わされる心の働きのある限られた部分は生得に由来する基本的な性質のものであり、そのほかの多くの部分は複合的な組み合わせによっているのに違いない。このことを考えると、私たちの「心の思想家たち」のどの部分が、人間という種にとって基本的な構成要素であるのかという問題もまた重要なものに違いない。

5　最後に

Johnson & Lakoff 1980は、文化の違いや思想の違いによって、同じ内容のことがらが、異なった方向に理解されることを指摘し、メタファーを使いこなす場合にも、文化や思想の違いが重要であることを指摘している。私もまた、竹内 1991-93 において、言語表現の使用は、場合によっては背後にある言語集団の文化や価値観、または力そのもののぶつかり合いに他ならないことを指摘した。文化や社会などの言語外的な要因と言語の意味の問題について、言語の意味と言語外の要因のカテゴリーを隔然と整理した上でその相互

の関係を研究すべきであると提案したのである。

この論文では、私は、Minskyの「心の社会」と言う考え方を使って、言語の意味を支える文化・思想的な諸要因の一部を「心の社会」に住む思想家たちとして扱うことを提案した。認知科学者であり人工知能研究家であるMinskyの考え方を借りることによって、言語の意味と言語外的な要因のインターフェイスの議論を、多少なりともわかりやすく一般的な形でもって提示できたと思う。

実際に取り上げた言語表現についての説明は、議論をわかりやすくするためのものであり、ある意味では一面的であり、表現のある側面を強調したにすぎないものも多い。しかし、言語表現の使用が多面的であることは前提として、その一面をえぐるだけでもそうはたやすい仕事ではない。この論文で指摘できたことがらのいくつかは、言語表現の意味に関係する問題としても興味深いものであると思う。理論の問題としても、言語事実の説明の問題としても、詳細な検討を今後さらに進めて行かなければいけないし、修正すべきことがらも明らかになってくるだろう。ここでの議論で提案した研究の方向をさらに実り多い形で進めていくためにも、多くの方々の御批判と御意見をいただければ幸いである。

文献

Bierwisch, Manfred 1983: Semantische und Konzeptuelle Repräsentation lexikalischer Einheiten. In: R. Růžička und W. Motsch (eds.), *Untersuchung zur Semantik*. Berlin: Akademie Verlag, S. 61-100

Eco, Umberto 1976: *A Theory of Semiotics*. Indiana University Press.(「記号論 Ｉ、ＩＩ」、池上嘉彦訳、岩波書店、1980)

Jackendoff, Ray 1989: *Semantic Structures*. MIT Press.

Johnson, Mark and Lakoff, Gerge 1980: *Metaphors We Live by*. University of Chicago Press. (「レトリックと人生」、渡辺昇一他訳、大修館、1986)

Minsky, Marvin 1986: *The Society of Mind*. Simon & Schuster.「心の社会」、安西祐一郎訳、産業図書、1990

Schwarz, Monika 1990: *Kognitive Semantikthoerie und ihre neuropsy-*

chologische Realität. Niemeyer
竹内義晴 1991-93： 言語文化論序説、第一部～第三部。言語文化論究、1号 63-70ページ、2号 63-84ページ、3号 37-54ページ